本文１（「雨蛙」）

（中央公論社　『日本の詩歌　12 巻』による）

（尾籠（びろう）ではあるが）僕が便所で蹲（しゃが）んで居ると、
死んだ子供の姿が眼に浮いて来る。
僕は下の方に付いて居る硝子障子の毀（こわ）れた骨を見て居るが、
これは死んだ子供が外を見ようとして足の親指にかけて折つたのだ。
彼が死んだ時弟の子供は四歳ばかりであつたが、
今は十歳にもなつて小学の二年生だ。
だが死んだ子供はいつも八歳で、
『漕げ漕げ漕げや』幼稚園で覚えた歌の声が、
便所で蹲んで居る僕の耳に響いて来る。
僕はなんの気無しに硝子障子を開ける、
そこに八手が一本植わつて居て、
黒ずんだ大きな葉の上に雨蛙が一疋ちよきんと坐つて居る。
どこかで見覚えのある恰好だと思ふと、
ああ、それは死んだ子供の裸姿であつた。

翌日僕が便所で蹲んで居ると、
死んだ子供の姿が眼に浮いて来る……
泥色になつた彼はぶるぶる震へて居る家内に抱かれて居る。
僕は一時の痙攣（けいれん）で直（す）ぐ呼吸をふき返すだらうと思つた。
ああ、愚かなるもの汝の名は詩人だ！
僕には生と死の異つた状態さへ見ることが出来なかつた
彼はその時已に死んで居たのだ。
僕は例の小さい硝子障子を開ける、
昨日の雨蛙は依然として今日も同じ八手の葉の上に坐つて居る。
見て居るうちに雨蛙が段々死んだ僕の子供のやうに
泥色して来ると思はれる。
僕は硝子障子をばつたり閉める……
死んだ子供が毀した骨が恐ろしく大きく見える。

三日目も同時刻に僕が便所で蹲んで居ると、
又もや死んだ子供の姿が眼に浮いて来る。
雨蛙の先生今日も居るだらうかと思つて、
例の小さい硝子障子を開けると、

不思議にも八手の同じ葉の上にちよきんと今日も坐つて居る。
『お前は……』と僕が声を出さうとすると、
雨蛙は飛びあがり、飛びあがるはずみに小便をしゆうとして
何処かへ姿を匿して仕舞つた。
しゆと小便をして！
さうだ、僕の死んだ子供もよくしゆと庭の松の木に小便をしかけたものだ。

本文２（「存在の孤独」）

（筑摩書房『現代日本文學大系　41』による）

『新らしい詩は私をもつて始まらねばならない、』
かう私がいつたら人は私を許すでせうか……
許さなくてどうしませうか。
毎朝咲く朝顔を御覧なさい、どの朝顔でも、
朝顔の美は自分をもつて始まるといふ誇りに輝いてゐるではありませんか、
太陽の下どんな物でも、神の与へた魂を赤裸（せきら）にさらけ出して、
（赤裸の場合位ものの完全な場合は無いであらう）
自分と大きな自然との対照を慎ましやかに表現した時、
本当に新しい一章に筆が附け始まります。
詩の上ばかりでなく、人生の上でも、
『新しい人間は私をもつて始まらねばならない、』
私はかういひたいのですよ。
私自身としましても、昨日の私は今日の私でありません。
毎朝太陽に私の眼が覚め、私の耳が鳥の声を迎へる時、
昨日と違つた人生の秘密が私にほぐれて来るやうに感じます、
（あなたが秘密の文字がお嫌なら、人生の意味と云ひませう、）
私はまるで異つた人間となつて新しい生命を始めます、
さうあつて初めて独立的な存在の意味が確立するだらうと思ひます。
『新しい詩は私をもつて始まらねばならない、』
私がかういつたとて、他人の努力を無視するのではありません、
他人は他人で、『新しい詩は自分をもつて始まる』といつて下すつて、
初めて私の言葉に真実の意味が出て来るだらうと信じます。